

明け方から、絹糸のような雨が、窓を濡らしていた。沈丁花の甘い香りが漂っている。

きょうは彼岸を過ぎての休日、久しぶりに閑をえて書斎に入った。こんなときは、別に考えることもなく本の背を眺めるのが私のくせ、とり出した1冊に『明治を伝えた手』（昭和44年、朝日新聞社）があった。杉村恒氏の写真集である。

おもに東京とその周辺から『江戸の文化』を伝えてきた手仕事、その伝統を継ぐ82人を写したものだ。街の片隅に生きる職人、明治の風雪を刻んだ顔が、魅力的である。

琴づくりに一生を賭けた今村権七さんもその一人だ。

「甲の仕上げは、焼鑊で表皮を黒く焼き、木賊、いぼたろう等で木目が美しく出るまで磨く。それに飾り琴には蒔絵師、飾り職、牙彫などあらゆる細工師の最高の腕前を必要とする。」 そんな名人芸をもった今村さんも「この辺でしまいですわ」と笑う。

### 琴作る桐の香や春の雨

夏目漱石の句が浮ぶひととき。

杜甫の「春夜喜雨」の中に「潤雨細無声」（雨潤して細かにて声無し）の詩がみえる。春の雨は、音がない。

『明治を伝えた手』に惹かれて、この本より2年ばかり前に出された『職人衆昔ばなし』

正、続二編（文芸春秋刊）を読みなおしてみた。

登場する50人はいずれも明治生れ。その職人の重い口を開かせる齊藤隆介氏。名人の気質がにじみでる珠玉の語り口が、著者の名筆にあって、感動を誘う。

著者は、名人上手に仕事のコツを聞きながら、こう感じ入っていた。

「そいつァ口じゃ言えねえよ。カンだよ。品物をよく見て味わってくれりゃ分かるよ」と必ず言います。論理的じゃない、味わえなんて観念的だ——、我々はすぐそう考えやすいのですが、実はこれこそ高次元の方程式で、「味わう」という、物に即して複雑微妙な過程を通過する用意のない粗忽な初等数学では到達し得ないあるものと、そこへ到る方法を教えてくれているのではないのでしょうか」（続編、「あとがき」）

どの職人も、「燻し銀のように渋い、又はきっぱりと潔い」顔立ちの写真が紹介されているが、撮影を断った職人が二人いた。一人は大工の木所仙太郎さん。「写真はいらねえ。もっと撮られてえ奴を撮ってやんな」と、きかない。

その仙太郎さんのところへ建築研究所のえらい先生がきて、「外国のカンナは台が鉄で減らないんで狂いがなくて良い」と言う。仙太郎さんが啖呵をきった。

——日本のカンナは木だから値打ちがあるんだ。朝に晩に手塩にかけて狂いを直して一番良い状態になってるから、五間あろうと、六間あろうと一気にサーッと柱も削れるんだ。木肌にピタッと吸いついて削りおろすあの手応えなんてものは、とても鉄の台じゃァ味わえないし、第一、削ったあとに独特のツヤがでらァ——



もう一人は、さしもの大工の溝呂木義郎さん。「写真を」と頼んだら、「そんなら話をのせるのも断る」で、写真なし。

よくないと思うと、作らない。棚の木厚と柱の太さを聞かれても、「そいつは目見できめる。何寸何分なんて物差しはかえって不正確だ」、なんていうもんだから、たいていの客は呆れはてて帰っちゃう。

現代は機械文明の時代だ、科学技術の発展は驚異的ですからある。機械はたしかに道具を凌駕したかに見える。しかし、「機械の発明とその実施とが、人類にとって無上の恩澤であったといい切れるだろうか」と問いかけるのは民芸運動の先駆者柳宗悦氏である。柳氏は数多く工芸文化を論じているが、そこを流れるのは「機械製品が手工品に優る場合はいたく少ない」、「製品の質と美とに於いては甚しく劣る」という思想だ。

私は興に乗って『柳宗悦選集』（春秋社）を開いてみた。一字一句丹念に読んだ。「手は活きているが、機械は生きていない」。この言葉が私の頭から離れなかった。「人間は手である。手によってつくり出される存在である」というのは書家の石川九楊氏。「『語り手』という言葉もあるように、人間は手の存在である。」（エッセイ『見失った手』日経新聞）と語り、機械化時代、技の荒廃を招く、と憂えていた。

染色家の堀尾真紀子さんも『職人さんの手仕事』というエッセイのなかに、「宇宙ロケットの先端部は、飛鳥、奈良時代の金銅仏を造るのと同じ鋳物の蠟型鋳造という技法によるものというし、新幹線の最前部車両のあのカーブもいわゆる手づくりで決めてゆくのだ」と書いている。

堀尾さんは「職人さんの心意気とカンによる手仕事が時代がどんなに進もうと、やっぱり私たちの原点にあるようだ」と感慨をこめる。

同じ思いを抱きながら、私は、3月も終わる日、大田区の蒲田を訪ねた。

### 海苔粗朶の中を走るや帆掛船

途中、品川沖や大森海岸の入り江が見えかくれするが、正岡子規が目にした海苔粗朶の海辺は、いまはない。

キネマ通りという懐かしい名の商店街がきれいところに、三津海製作所があった。得意とする真空ポンプは紙幣計算器として信頼が高い。「特許はとっていませんよ、技術に自信があるから」と渡辺陽治社長はくったくがなかった。

町工場で5年間小僧同様の旋盤工、蒲田に来て半世紀になるという渡辺さんは、機械のことならなんでもわかると目を細める。社長というより親方だ。この地域を歩くと、「物をつくるのが好きだから」という声がかえってくる。職人氣質が迎えてくれる街であった。

私が、大田区の中小企業集積に興味をもったのは、『フルセット型産業構造を超えて』（関満博著、中公新書）を読んでからである。

大田区は、戦前、軍需工場を支えた機械工業基盤を形成していたが、それまでは「浅草海苔」を養殖する地場産業として栄えていた。戦後東京湾の改造で、海苔業者は陸に



上がる。広大な海苔の干場は、簡易な貸工場となり、独立を願う職人や海苔業者自身が、機械工業の加工業者に転じていった。

「大田区工業は、日本産業の『支持基盤』、あるいは『公共財』ともいうべき高度かつ高密度な工業集積を形成することに成功したのであった。さらに仲間仕事をベースにする濃密なネットワークのなかでの競争意識と成功への願望は強く、自らの技術をいかに高度化、特殊化させるかが求められていた」（前掲書）

もう一つ私が興味をもったのは唐津一氏の論文であった。

「東京都の大田区は、技術という点ですごいところである。試作品を作りたいと思って連絡すると、多少いい加減な図面を渡しても、あっという間に試作品を届けてくれる。それも1000分の1ミリ以上の精度で、どのような順序で加工したらよいか設計者自身が首をひねるような形のものを、ちゃんとその通りのものを作ってくれるのである。」

（『世界に誇る技術 技術職人の町を守れ』、日経ビジネス）

そんなところへ、渡辺社長も登場するビデオ『金属が夢みる岸边、東京大田区ハイテクと町工場』（NHK教育テレビ）を見たのである。『誰かが夢を見ている』——ファンタジックで詩情ゆたかな映像、私は思わず吸いよせられた。ナレーションがころよい。

ラップ星という星がある

有名な三兄弟が住んでいた

三兄弟がやってくると すべてのものがピッカピッカにみがかれてしまう

ある日のこと宇宙船がやって来て 太陽系の星をみがいた

冥王星も 木星も 海王星も 金星も

つぎつぎにみがいて 軌道をめぐりはじめた

——三兄弟の一人が語る。

地球上には完璧に平らなものは存在しない。それはアイデアの世界のものだ。人間の体には感知能がある。指先でなぞるだけで千分の一ミリのキズがわかる。深さがわかる。

この三兄弟が大田区の町工場で働いているのである。

今年の1月28日の夜のことだ。私は何気なくNHKスペシャル『職人技が消えていく 町工場が支えたハイテク日本』にチャンネルを合わせていた。800に近い町工場が集まる大田区糀谷地区。設計図1枚届ければ、翌日には試作品ができる。仲間まわしといわれる零細業者のネットワークぶりが紹介されていく。質の高い職人技を誇り、町全体でハイテク日本を支えている姿を浮彫りにしていた。

「コンピューター制御の旋盤もつくるが、仕上げは手仕事だ。千分の一ミリの精度、目で見てわからないけれど、手で見ればわかる。この指先がつくってくれる。」と語る大友冠さん。その大友さんが、高速増殖炉原型炉『もんじゅ』のナトリウム漏洩事故を伝えたテレビ画面に釘付けになる。

折れた温度センサーのさや管を作っていたのである。注文主からはどの場所で、どんな状態で使われるのか知らされていない。千分の一ミリ単位のきびしい指示がなされていたという。

「金属は使われる条件によってゆがみや膨張をおこすことがある。この金属の特性を考慮して、設計図にはない微妙な遊びをつくる必要があると考えているんですが……」。大友さんのつぶやきが、いつまでも消えなかった。

「手で見る」。千分の一ミリの精度をたしかめる手。それは20年、30年の修業、鍛練と経験から生まれる。外国でもHand madeという言葉は優れた品物としての信頼性が高いという。

私たちは、この「手」に学ぶ謙虚さが、欲しいように思えてならない。

柳宗悦氏は「凡ての工（たくみ）は手に據る」といていた。「手」が、「たくみ」の技（わざ）が、問いかけている言葉に、耳を傾けたいものだ。

寝つつ読む本の重さにつかれたる  
手を休めては物を思へり

石川啄木

（衆議院議員）